

『幕が上がる』

西松 優まさる

2015年 ティ・ジョイ、東映 119分

監督 本広克行

原作 平田オリザ

脚本 喜安浩平

出演 百田夏菜子、玉井詩織、高城れに、

有安杏果、佐々木彩夏、黒木華、

志賀廣太郎、ムロツヨシ

「ももクロ」のアイドル映画だと思っていたら、見ごたえのある青春映画の秀作だった。弱小高校演劇部が元演劇女王だった新任女性教師・吉岡（黒木華）の指導を得て、新部長・サオリ（百田夏菜子）を中心に厳しい練習に耐え地区大会を突破し全国大会を目指していく物語だ。

この映画に心惹かれるのは、縦軸で部員達が演劇の魅力を教わり悩みながら成長していく過程を描く一方、横軸で吉岡の生き方を描き、演劇を目指す「2つの生き方」を対比して見せるからだ。部員達のひたむきな演劇への姿勢を見て、吉岡は断ち切った「役者の道」へもう一度進む決意をし、教師の地位・母親・部員達を捨てていく。つまり、両者の生き方が互いに化学反応を起こし「お互いの生き方」を変えていくのだ。それだけに、突然部員達が稽古中に集められ、吉岡

から届いた別れの手紙を聞くシーンは名場面だ。手紙を読む声が途中からそこにはいない吉岡の声になると同時に、吉岡との思い出の回想シーンとサオリの困惑顔が短いカットで映し出され、サオリの吉岡への尊敬の念と裏切られた思いが交錯する。吉岡の深く苦悩するシーンは意図的に描かないが、吉岡の断ち切った演劇への募る思いと苦悩が、観客に「想像」の中で増幅される。

また、サオリ・中西が全国大会見学から帰る夜の駅のベンチで話すシーンも印象的だ。転校して居場所のない中西と演劇部に居場所を見つけたサオリが「それでも人は一人だよ・・・」「でもここにいるのは二人だよ・・・やりませんか一緒に」と話すと、スーと列車がホームに入り、中西が「銀河鉄道みたい・・・」と言うとカメラはホームからパンしてきれいな星空を写し出す。2人が友情を確認した名場面だ。なぜか忘れ去った高校時代の私の感性が蘇ってきた気がした。演劇部員達の幕が上がる直前の裏方作業や表情を短いカットでつないでピンと張りつめた本番前の息遣いを伝えたり、田舎道・土手を自転車で走るサオリ達や高校構内のざわつく廊下・階段・教室を何度も写し出して、ドキュメンタリータッチでリアルさを醸し出す。また、全体を軽快なテンポで短いカットでつなぎ、注目してほしい所はカメラをゆっくり回り込んで包み込むようなショットで観客を劇中にやさしく誘い込む。

この映画の成功は、よい原作、「ももクロ」5人にぴったりの人物造形と原作を進化させて吉岡を「もう一人の主役」にした脚本、等身大の女高生を体現する「ももクロ」の素人っぽさを残した演技だ。そして、黒木華の秀逸な演技と脇役の志賀廣太郎、ムツヒロシがそれを支えている。
「幕が上がる」のは、サオリ達だけではない。いま、新しい吉岡の生き方の幕が上がる。

